

# 観光PRを目的とする“鳥取県東部温泉地域”の評価

環境計画研究室 佐藤 暢晃

## 1. 背景と目的

鳥取県東部地域の各温泉は、近年入湯客数の減少が顕著である(図1)。高速道路の開通や高齢化社会に伴う近場観光地の復権を控え、東部諸温泉の再興を図ることで鳥取県内における観光地選択肢を増やすことが重要である。

また、温泉は泉質偽装やレジオネラ症問題など、泉質に関する不祥事が多く起きている。一方、泉質は環境省のアンケートにより、どの温泉に行くかを定める重要な指標にもなっている。すなわち、温泉にとって泉質が重要な評価ポイントであることがわかる。本研究では、鳥取東部温泉の泉質を明らかにし、比較することで泉質を基とした温泉PRを考える。

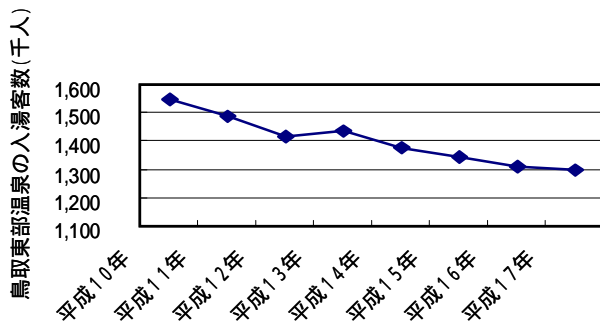


図1 鳥取県東部温泉の入湯客数の推移

## 2. 研究方法

本研究では、温泉施設に掲示されている温泉分析書の泉質データを用いて、全国の温泉と鳥取県東部温泉をクラスター分析によって温泉水質区分を行った。次に、鳥取県東部温泉の温泉浴槽水の水質分析を行い、これらのデータを用いてクラスター分析を行った。水質分析では ICP-質量分析装置、ICP-発光分析装置、イオンクロマトグラフィー、および TOC・T-N 計を用いた。温泉分析書に表示されている最大溶存物質に基づく泉質、同分析書データを用いたクラスター分析による温泉水質区分および実測値による温泉水質区分を比較した。

## 3. 結果と考察

温泉分析書データより溶存物濃度を加味した温泉区分を試み、従来から行われている泉質区分(2区分)とは異なる結果を得ることができた(4区分)。

実測データと温泉分析書データを比較した結果、両者が類似していることから温泉分析書データが有効であること、あるいは浴槽水が源泉に近いことが確認できた。微量成分の影響を見るために実測データを基準化したデータによりクラスター分析を行った(図2)。その結果、温泉1および温泉4のグループ、温泉2、温泉3および温泉5のグループ、温泉6のグループ、温泉7のグループの4種類のグループに分かれた。

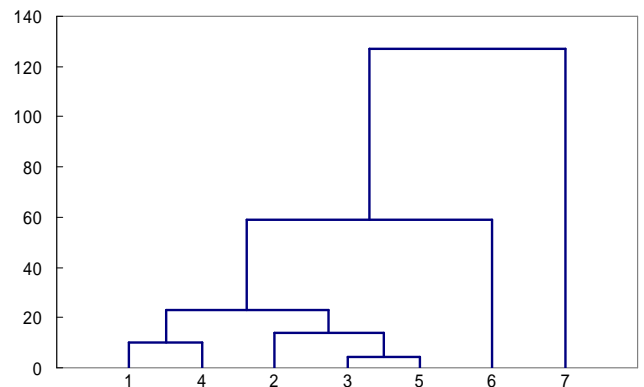


図2 基準化した値でのクラスター分析

## 4. まとめ

各温泉について実測データと温泉分析書のデータが類似していることがわかった。また、実測データの基準化を行い、そのデータで分析することで温泉分析書の分類とは異なった微量成分を考慮に入れた濃度よりの分類を行うことができた。そして、それらの結果より、溶けている物質が少ない方から温泉1および温泉4のグループ、温泉2、温泉3および温泉5のグループ、温泉6のグループ、溶けている物質の多い温泉7のグループの4種類のグループに分けられた。4種類の温泉を巡ることで鳥取県東部温泉の特徴ある泉質が味わえると言える。